SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ハイダ語の人称代名詞の自立形とクリテイック形について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀, 博文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009115

ハイダ語の人称代名詞の自立形とクリティック形について

堀　　博文

1．ハイダ語の人称代名詞の概観

ハイダ語の人称代名詞には，統語的なふるまいの上で自立形とクリティックclitic形の二種類，格の上で動作者格と目的格の区別，数の上で単数と複数の区別がある[1]。これらの区別は，1人称から3人称のすべてに揃っているわけではなく，次の一覧が示すように，人称によってはいずれかを欠く代名詞もある[2]。

(1)　ハイダ語の人称代名詞

		自立形		クリティック形	
		動作者格	目的格	動作者格	目的格
1	単数	*ɬaa* ～ *ɬa*	*dii*	*ɬə*	
	複数	*t'aləŋ*	*ʔiitl'ə*		
2	単数	*daa* ～ *da*	*dəŋ*		
	複数	*daləŋ*			
3		*'laa* ～ *'la*		*'lə*	

これらの区別のうち，動作者格と目的格の違いについて概略を述べると，前者は，他動詞節の主語と自動詞節の主語，後者は他動詞節の目的語と自動詞節の主語，更に，所有構造において親族名称や身体部位名称などのいわゆる譲渡

[1] ハイダ語Haidaは，アメリカ合衆国のアラスカ州南東部とカナダのブリティッシュ・コロンビア州北西海岸地域のハイダ・グワーイ Haida Gwaii（クィーン・シャーロット諸島）で話される系統不明の言語である。方言は，大きく分けて北部方言と南部方言があり，北部方言は，アラスカ州南東部とハイダ・グワーイの北部，また，南部方言は，ハイダ・グワーイのグラハム Graham 島南部で話される。本稿で扱うのは，ハイダ・グワーイのスキドゲイト Skidegateで話される南部方言である。

[2] この表は，ハイダ語の人称代名詞のすべてを網羅したものではない。ハイダ語には他に不定の人称代名詞があるが，ここでは考察の対象としない。

不可能物の所有者として現われる。自動詞節においては，その主語が人称代名詞の場合，その格は，動詞の意味特徴によって動作者格と目的格のいずれかが現われ得ることから，ハイダ語は，いわゆる分裂自動詞性を有するといえる（詳細はHori 2008を参照されたい）。(1) に示すように，これら２つの格の区別は，１人称単数と複数，２人称単数にしかみられず，２人称複数と３人称においては，両者の区別はない。

数については，形式上，３人称代名詞には単数と複数の区別がないが，述語となる動詞に３人称の複数を表わす接尾辞を付加することによって３人称代名詞の複数性が表わされる。この時，３人称代名詞がその節において如何なる統語的役割を担おうと，すなわち，それが主語，目的語（他動詞節の場合）のいずれであっても，その接尾辞によって３人称の複数性が示される[3]。

さて，本稿で以下に詳しく扱う自立形とクリティック形の区別は，(1) に示すように，１人称単数の動作者格と３人称に限られており，他の人称・数・格では，自立形とクリティック形の区別はなく，現われるのは自立形のみである（より正確にいえば，それらの人称代名詞において自立形とクリティック形を区別する形式的な根拠はない）。また，形式的にみて，１人称単数と３人称，更に，２人称単数の自立形には，長い形式（すなわち，*łaa*（１人称単数），*'laa*（３人称），*daa*（２人称））と短い形式（すなわち，*ła*（１人称単数），*'la*（３人称），*da*（２人称））の二種類がある。この違いは，統語的なそれというよりも，単純に発話の速度によるものと考えられ，実際，前者の長い形式は，その人称代名詞を強調したい時などのゆっくりとした発話（ゆえにストレスがおかれる），対して，後者は，はやい発話（ゆえにストレスはおかれない）に現われる傾向がある。ただ，*='uu*（焦点標識；FOC）や*=sɢun* 'only'，*=ʔəsəŋ* 'too' などのクリティックのホストになり得るのは，前者の長い形式であり，基本的に短い形式は，一部のクリティック（後置詞）を除いてホストになることはない。更に，短い形式は動詞の直前に現われることが多い。このようなふるまいから，これらの短い形式は，統語的にクリティック形に近いといえるものの，本稿では，これら短い形式は，自立形の弱形と見做し，以下では，表記の上では長い形式と短い形式を区別をするが，いずれも自立形として扱うことにする[4]。

---

[3] 実際には，ここに述べた接尾辞によって複数性を標示する方法だけでなく，複数形に相当する*'laaɢaaŋa*という人称代名詞もある。また，複数性の標示は必ずしも義務的ではないために，この接尾辞が現われないこともある。

[4] 音韻面について３人称代名詞を例にとって付言しておくと，長い形式*'laa*は ['lá:]，短い形式*'la*は ['lá] として実現する。ハイダ語における声調は，音声的に高 [´]，中 [unmarked]，短 [`] の

1人称単数動作者格代名詞の*ɬə*と3人称代名詞の*'lə*をクリティックと見做すのは，まず3人称代名詞のそれは，動詞に直接付くだけでなく，名詞にも付き得るからである。上述のように，所有構造において，被所有者が譲渡不可能物を表わす名詞で，その所有者が人称代名詞である場合には，目的格のそれが現われるが（例：*dii stlaay* 'my hand(s)'），その際3人称が所有者の場合は，クリティック形が現われる（例：*'lə=stlaay* 'his/her hand(s)'）[5]。このように，1つの語類ではなく，少なくとも二種類の語類に付加される点から，3人称代名詞の*'lə*はクリティックであると見做し得る。

一方の1人称単数動作者格代名詞は，専ら動詞にしか付かないゆえに接頭辞と見做し得るが，音韻的な根拠からやはりクリティックと捉えるのが妥当であると考える。詳細はここでは述べないが，ハイダ語では，語の第1音節のライムが /V/ である場合（例：/k'ajuu/ 'sing' の下線部），そのライムは，音声的に低声調を担う長母音（すなわち [V̀:]）として実現するという音韻規則がある（例：/k'ajuu/ [k'à:d͡ʒú:] 'sing' の下線部）。この規則は，基本的に語の単位を範囲として適用されるので，もし1人称単数動作者格代名詞の*ɬə*（音声的には側面音[l]を音節主音とする[ɬ̩]として実現する）が接頭辞であったならば，/V/ タイプのライムは，語頭から数えて第2音節に位置することになり，短母音として実現する，つまり，例えば，1人称単数動作者格代名詞*ɬə*が付いた場合，/k'ajuu/ 'sing' は，[ɬ̩k'àd͡ʒú:] のように短母音で実現するはずである。しかし，実際には，1人称単数動作者格代名詞の*ɬə*が付いても /V/ タイプのライムは，[V̀:] として実現する（つまり，/k'ajuu/ 'sing' は，[ɬ̩k'à:d͡ʒú:] と実現する）ことから，依然 /k'ajuu/ は1語であり，1人称代名詞の*ɬə*もまた別の1語，すなわちクリティックと見做し得る。このような音韻的な事実を考えれば，1人称単数動作者格代名詞の*ɬə*は接頭辞ではなく，クリティックと見做すのが妥当である。

1人称単数動作者格代名詞の*ɬə*と3人称代名詞の*'lə*は，述語となる動詞の直前に現われるが，主語や目的語となる名詞句が同じ節の中にある場合，いわゆる人称接辞とは異なり，原則的にそれらと同時に現われることはない。言い換

三種類があり，いずれの声調が現われるかは，音節構造から予測することができる。高声調が現われるのは，音韻レベルで /VV/ のライムに限られ，/V/ が高声調を担うことは原則としてない。このことからも短い形式*'la*は，*'laa*の弱形と考えるのが妥当であると考えられる。

[5] ハイダ語の3人称代名詞は，性の区別がなく，また無生物を指示することもある。以下の例の英語訳において 'he/she/it,' 'his/her/its' などのいずれかが当てられているのは，その文が発せられた文脈によるものである。

えれば，同一指示的な機能は，これらのクリティック形にはない（但し，後述するように，3人称代名詞の場合は，同一指示的な用法がある）。また，自立形の人称代名詞はクリティック形と同じ節に現われないので，自立形の人称代名詞は，いわゆる強調のために用いられるというわけでもない。

これらの人称代名詞の自立形とクリティック形は，次の例が示すように，互いに交換可能である[6]。

(2) a. *'laa* *ɬə=qiŋ-gən.*
3 1SG.AG=see-PAST
'I saw him/her.'

b. *'laa* *ɬa* *qiŋ-gən.*
3 1SG.AG see-PAST
'I saw him/her.'

(2a) では，1人称単数動作者格代名詞のクリティック形*ɬə*が現われているのに対し，(2b) では，その自立形*ɬa*が現われており，いずれも述語*qiŋgən*「見た」の主語の役割を担っている。上に述べたように，これら自立形とクリティック形は同じ節に同時に現われないことがこれらの例からも分かる。また，主語と目的語がともに人称代名詞の場合の中立的な語順は，目的語 (O)—主語 (A) である[7]。

---

[6] 以下のハイダ語の例においては，1行目に音素レベルの表記，2行目に各々の形態素の訳（グロス）を付す。ハイダ語は，基底レベルから音素レベルを導き出す形態音韻規則が比較的単純なので，音素レベルの表記に形態素境界を入れて各々の形態素を示すことにする（形態音韻規則によって形態素間の境界が定め得ない場合は，グロスにおいてそれらの形態素の意味を［ ］に入れて示す）。また，注記がない限り，ここにあげるハイダ語の例は，筆者がハイダ語話者から得たものである。逐語訳で使われている略号は，次の通りである。AG: agentive, ATTR: attributive, CAUS: causative, CL: classifier, DUR: durative, EMPH: emphatic, EVD: evidential, FOC: focus, HABIT: habitual, INCEP: inceptive, INDF: indefinite, INFO: informational, ITER: iterative, NEG: negative, NOM: nominalizer, N>V: verbalizer, OBJ: objective, PL: plural, QUOT: quotative, SG: singular。またハイフンは接辞の境界，+は語根同士の複合を表わす。尚，グロスにおいてROOT, CONTACTなどスモールキャピタルで示されているのは，手段接頭辞や類別接頭辞を必要とする「拘束語根」である。

[7] 「中立的」というのは，節における主語や目的語などを節の前方に移動させる焦点標識=*'uu*など談話機能標識の現われない場合をいう。但し，この例の場合は，1人称単数動作者格代名詞が他動詞節の主語であることが形式から分かるので，焦点標識がなくても，主語の1人称単数動作者格代名詞が目的語の3人称代名詞の前に現われることも可能である（その場合，3人称代名詞はクリティック形が現われる。後述参照）。また，主語と目的語がともに名詞句である場合の中立的な語順は，A（主語）—O（目的語）であるが，それぞれAとOとなる名詞句の表わす有生性によってOAの語順も可能である。

しかし，これらの自立形とクリティック形が常に交換可能というわけではなく，一定の統語的制約や談話における役割により，どちらか一方しか現われない場合もある。以下，本稿では，１人称単数動作者格代名詞（以下では，単に「１人称代名詞」と称する）と３人称代名詞の自立形とクリティック形のいずれが現われるかは，主に統語的な要因と談話的な要因が大きく関わっているという解釈を示す。

2．人称代名詞の自立形とクリティック形が現われる統語的環境

人称代名詞が２項動詞[8]の主語に現われる場合，統語的な制約によって自立形もしくはクリティック形のいずれか一方しか現われないことがある。本節では，そのような統語的環境について詳しく述べる。

ハイダ語では，２項動詞の目的語は，文脈から特定できる場合，現われる必要がなく，主語だけが現われることがある。そのような場合において，主語が１人称あるいは３人称の代名詞である時，現われるのは自立形の方であり，クリティック形は現われない（Enrico 2003: 403）。次に示す (3) は１人称代名詞が主語として現われている例である（ここでは，本来目的語が現われる位置をØで示す）。

(3) a. *huu ʔaan* Ø ***ɬaa***/**ɬə=tlə-ɢa-sdlə-gən.*
then here (it) 1SG.AG by.hand-CL-ROOT-PAST
'Then I started it (=Ø).'

b. *gəm* Ø ***ɬaa***/**ɬə=gudəŋ-ɢəŋ-gən.*
NEG (it) 1SG.AG hear-NEG-PAST
'I did not hear it (=Ø).'

b'. *gəm dəŋ kil* ***ɬaa***/*ɬə=gudəŋ-ɢəŋ-gən.*
NEG 2SG.OBJ voice 1SG.AG hear-NEG-PAST
'I did not hear your voice.'

(3a) と (3b) では，目的語が現われていないために，主語となる１人称代名詞は自立形*ɬaa*しか現われないが，目的語が現われている (3b') では，クリティック

[8] ここでいう２項動詞には，使役接辞（CAUS）や手段接頭辞で拡張された動詞も含む。

形*łə*も現われ得る。

クリティック形は，述語の直前に現われるため，そのクリティックと述語の間に他の要素が現われることはなく，例えば，AOVの語順にする場合は，Aには1人称代名詞の自立形しか現われない。例えば，

(4) a. *huu łaa gə q'ułda-gən.*
then 1SG.AG INDF steal-PAST
'Then I stole some.'

b. *'laa=ɢan ła nəŋ dah-gən.*
3=for 1SG.AG INDF buy-PAST
'I bought one for him.'

(4a) では目的語の*gə* 'some'，(4b) では同じく*nəŋ* 'one'（いずれも不定の人称代名詞）が主語となる1人称代名詞の後に現われているが，このような語順は，いずれも不定の人称代名詞の場合に限られるようで，上に述べたように，人称代名詞が主語となる場合は，目的語がその前にくることが多く，もし目的語の前に主語となる人称代名詞を置く場合には，焦点標識などの談話機能標識が付加されるのが普通である。

3人称代名詞も同様に，目的語が明示されない場合，主語として現われるのは自立形のみである。

(5) a. *ɢandlaay=guud='uu Ø 'la/*'lə=łɢi-tad-gi-daal.*
the.water=along=FOC (gravels) 3 by.digging-CL-LINE.UP-along
'He piled up gravels (=Ø) along the edge of the water.'

b. *ʔisəŋ daɢuŋ=ɢii Ø 'la/*'lə=t'a-c'i-gən.*
again pocket=into (fish) 3 by.cramming.in-ROOT-PAST
'He shoved fish (=Ø) into his pocket again.'

但し，3人称代名詞が2項動詞の主語である場合は，そもそもクリティック形が現われることが少なく（4節参照），たとえ目的語が現われたとしても，主語には3人称代名詞の自立形が現われることが多い。

また，1人称代名詞と同様，主語となる3人称代名詞と述語の間に他の要素がある場合は，自立形の3人称代名詞しか現われない。例えば，

(6) a. *gaay=sda* *ɢaal* *sdiŋ* *Ø=gu* ***'la*** *'laa=guɢii* *gina* *ʔisda.*
and.then night two Ø=at 3 3=onto thing put
'And then they put stuff onto it for two days there (=Ø).'

b. *dii* ***'la*** *'laay* *taan-ɢa-χal.*
1SG.OBJ 3 to.it get-go.on.foot-tell
'He told me to get it.'

(6a) では後置詞句 *'laa=guɢii* 'onto it', (6b) では同じく *'laay* 'to it' (< *'laa=gi* [it=to]) がそれぞれの主語となる人称代名詞と述語の間に現われている。

ハイダ語における2項動詞には，その目的語に標識が付かないものと標識（後置詞）を要するものがある。前者において目的語が明示されていない場合の例は，先に (3) にみた通りであるが，後者において目的語となる名詞句が現われない場合は，次の例に示すように，標識となる後置詞だけが現われて，名詞句そのものは現われない。その際，主語が人称代名詞の場合は，上と同様，現われるのは自立形であり，クリティック形は現われない。(7) は1人称代名詞，(8) は3人称代名詞が主語として現われている例である（上例と同じく，目的語をØで示す。また，目的語の標識となる後置詞を太字で示す[9]）。

(7) a. *Ø=**ʔad*** *ɬa/*ɬə=gyaadah-gən.*
(it)=with 1SG.AG sell-PAST
'I sold it (=Ø).'

b. *Ø=**gi*** *ɬa/*ɬə=giwst'a-gən.*
(it)=to 1SG.AG listen-PAST
'I listened to it (=Ø).'

b'. *sɢaləŋaay=gi* *ɬa/ɬə=giwst'a-gən.*
the.song=to 1SG.AG listen-PAST
'I listened to the song.'

(8) a. *Ø=**gi*** *'la/*'lə=dayiŋ-gən.*
(it)=to 3 look.for-PAST
'He looked for it (=Ø).'

[9] グロスでは，後置詞の本来的な意味を示す。

b. Ø=*ɢii* *'la/*'lə=dəŋɬə-gən.*
(it)=into 3 tear-PAST
'He tore it (=Ø).'

(2) と同様，主語となる１人称代名詞は，目的語がある場合は，自立形とクリティック形の両方が可能である（(3b') も参照[10]）。

一方，主語が３人称代名詞の場合は，たとえ目的語があったとしても，自立形の方が現われる傾向にあるが，２項動詞のうち，主語に目的格の人称代名詞を要求する動詞[11]の場合は，目的語が現われていなくても，主語には自立形よりクリティック形が現われることが多く，逆に自立形は現われにくいようである[12]。例えば，

(9) a. Ø=*siɬɢa* *ʔ'laa/'lə=guuɬ-s-ii.*
Ø=after 3=regret-NONPAST-INFO
'He was sorry at having lost it (Ø=the dog salmon).' (Swanton 1905: 7)[13]
b. Ø=*gi* *ʔ'laa/'lə=sdaɬaa-s-ii=gyaan='uu ...*
Ø=to 3=need[EVD]=and=FOC
'He wanted it (Ø=to eat the salmon) and ...' (Swanton 1905: 81)

---

[10] 但し，Enrico (2003: 403) は，このように目的語が現われている場合，１人称代名詞はクリティック形に限られるとしている。しかし，１人称代名詞の自立形が現われる例が実際に確認されていることから，Enrico (2003) の述べることと食い違いがみられる。この違いの要因は，ことによると，話者の年代差によるものかもしれない（Enricoの話者は，いずれも1900年辺りに生まれた話者で，現在の話者のひとつ上の世代である）。

[11] このような動詞を目的格動詞といい，一方，主語に動作者格を要求する動詞を動作者格動詞という。両者の意味的な違いは，主に [agency] と [control] という２つの意味特徴で記述することができ，典型的な目的格動詞はその両方の意味特徴を欠くのに対し，動作者格動詞（例えば，*xyaaɬ* 'dance,' *qaa* 'walk,' *suu* 'say,' *tyaah* 'kill, catch' など）はその両方の意味特徴を有する（詳しくは Hori 2008を参照）。

[12] 目的格動詞には，例えば，NP$_1$=*gi* NP$_2$ *sdaɬə* 'need, want,' NP$_1$=*gá* NP$_2$ *k'uugaa* 'love,' NP$_1$=*gan* NP$_2$ *ʔunsid* 'know,' NP$_1$ NP$_2$ *gud'laa* 'like' など（NP$_1$は目的語，NP$_2$は主語を表わす），感情や認識などを表わす動詞が多く，概して他動性が低い。これらの動詞においては，動作者格と目的格の区別のある１人称単数・複数と２人称単数の代名詞（上掲の (1) を参照）が主語（=NP$_2$）となる場合は，目的格が用いられる。例えば，

gəm *'lə=kiɢaay=ɢan* *dii* *ʔunsid-gəŋ-ga.*
NEG 3=name=for 1SG.OBJ know-NEG-NONPAST
'I do not know his/her name.'

[13] Swanton (1905) から引用する際は，表記を本稿のものに統一し，分析に修正を施した。また，形態素分析をする際に適宜Enrico (2005) を参照した。

2項動詞において1人称と3人称代名詞が主語として現われる時の自立形とクリティック形の分布についてこれまで述べてきたことをまとめると，次の表のようになる。

(10) 1人称代名詞と3人称代名詞の自立形とクリティック形の分布

			目的語	
			あり	なし
主語	1人称		*ɬaa / ɬə*	*ɬaa*
	3人称	動作者格動詞	*'laa*	*'laa*
		目的格動詞	*'lə*	*'lə*

この表から分かるように，1人称代名詞は，2項動詞の目的語がない場合は，自立形しか現われず，逆に，目的語がある場合は，自立形とクリティック形の両方が現われ得る。一方，3人称代名詞における自立形とクリティック形の現われは，一見したところ，動詞の種類，すなわち，動作者格動詞か目的格動詞かによって決まっているかのようである。言い換えれば，自立形は動作者格，対して，クリティック形は目的格に相当するようにみえるが，次の例が示すように，1項動詞の場合は，動作者格動詞であってもクリティック形が現われ((11a))，逆に目的格動詞であっても自立形が現われる（(11b)）ことから，自立形とクリティック形の違いは必ずしも動作者格と目的格の違いではないといえる。

(11) a. *ʔila='uu huuχan 'lə=sda-skiigaa.*
but still 3=by.kicking-shake
'But she was still kicking her feet.'

b. *'laa gəw-s=gyaan ...*
3 be.gone-NONPAST=when
'When she was gone ...'

(11a) の動詞は，1人称代名詞が主語の時に動作者格が現われることから動作者格動詞，一方，(11b) の動詞は，同じく目的格が現われるゆえに目的格動詞である。

更に，3人称代名詞の自立形が現われる環境について述べると，3人称代名

詞が主語あるいは目的語となる名詞句と同じ節に現われて同一指示的に用いられる場合もあり，その時は，自立形が用いられる傾向にある。例えば，

(12) a. *'laa-ɢa cit'iisgu*$_i$ *ɢəwdlaas* ***'laa***$_i$ *gay-gəw-giŋ.*
her coat new 3 by.floating-CL-BE.ON.THE.WATER
'Her new coat was floating.'

b. *30-foot-gaa*$_i$ *Joker=han='uu* ***'la***$_i$ *łə=kiɢa-da-gən.*
30-foot-N>V Joker=QUOT=FOC 3 1SG.AG=be.named-CAUS-PAST
'I named a 30-foot (boat) "Joker."'

(12a) の３人称代名詞は，主語の*cit'iisgu* '(her new) coat' を，また，(12b) のそれは，目的語の*30-foot-gaa* '30-foot (boat)' を指示しており，いずれも現われているのは自立形の方である。このような３人称代名詞の同一指示的用法は，主語や目的語となる名詞と述語の間に他の要素が入った時にみられることがある。勿論，これらの例において３人称代名詞が現われなくても文として成立する。

これまでの例から明らかなように，ここで問題とする１人称単数動作者格代名詞は，２項動詞もしくは１項動詞をそれぞれ述語とする節の主語に限られているのに対し，３人称代名詞は，それらに加えて，２項動詞の目的語としても現われるなど，両者の現われる統語的環境が異なる。従って，以下では，１人称代名詞と３人称代名詞とを分けて，それぞれの自立形とクリティック形の現われとその機能の違いについて考察することにする。

３．１人称代名詞の自立形とクリティック形の現われ

本節では，１人称代名詞の自立形とクリティック形が単文と複文の各々において，それぞれどのような談話上の機能を担っているのかについて述べる。

３．１　単文における１人称代名詞の現われ

テキスト（談話資料）をみる限り，１人称代名詞は，２項動詞の述語であれ，１項動詞の述語であれ，その主語として現われる場合，自立形よりもクリティック形の方が用いられる傾向にある（但し，２節で述べた，２項動詞の主語として自立形が選ばれるような環境は除く）。その傾向は，特に話者が自身のことについて語る独話で著しく，それは，その独話における参与者である話者（＝１人称）の視点から談話が展開するからである。例えば，次にあげるのは，ある

話者が自身の子供の頃に初めて捕まえたキングサーモンについて語った思い出話の最初の部分である（以下では，ひとまとまりの談話を引用する際は，各文を [ ] 付きの数字で示す)。

(13) [1] *dii* *ɢaχa-gən=dləw* *'lənagaay=q'adgu* *tləw* *qwaan*
1SG.OBJ child-PAST=when village=in.front.of boat many
q'ada *t'aaɬaa+gaylaŋ.*
away.from.inland be.anchored+float
'When I was a child, many boats were anchored way out in front of the village.'

[2] *gaay=dləw* *tləw* *k'ájuu=gu='uu* *ɬə=giinəŋ-gwaaŋ.*
that=when boat small=on=FOC 1SG.AG=row-about
'At that time I rowed around on a small boat.'

[3] *qwaay=ʔad* *sdlaagul='uu*
rope=with spoon=FOC
ʔiid *ɢuŋɢa* *tləwaay=sda* *ɬə=ʔisda.*
our father the.boat=from 1SG.AG=take
'I took a line and a spoon from my dad's boat.'

[4] *gaay=ʔad='uu* *ɬə=ɢaad-xa-gi.*
that=with=FOC 1SG.AG=by.pulling-CL-ROOT
'I trolled with these.'

[5] *tləw* *gaylaŋ-s=ɢaduu='uu* *ɬə=ɢaad-xa-gi.*
boat float-NONPAST=around=FOC 1SG.AG=by.pulling-CL-ROOT
'I trolled around the floating boats.'

(13[1]) はその独話の冒頭の文であり，その後に自身の行為について述べている文が続いている。それらの動詞をみてみると，(13[2]) の *giinəŋ* 'row', (13[4], [5]) の *ɢaadxagi* 'troll' が１項動詞であり，(13[3]) の *ʔisda* 'take' が２項動詞というように，１人称代名詞は，動詞の結合価に拘わらず，クリティック形が用いられる傾向にあるといえる[14]。これは，上に述べたように，２項動詞の主語が

[14] 大まかな数字ではあるが，テキスト中の単文に現われた１人称代名詞の自立形とクリティック形の頻度をみてみると，クリティック形の出現率は，他動詞（２項動詞）文114例のうち80％強，また，自動詞（１項動詞）文55例のうち約90％であることから，クリティック形が用いられるこ

1人称代名詞の場合は，語順は目的語—主語—述語のようになり，2項動詞を述語とする文においてより重要な情報を担う目的語が前に現われることと関係していると考えられる[15]。一方，1項動詞を述語とする文では，副詞や後置詞句が文頭に現われ，主語となる人称代名詞は述語に近い位置に現われる傾向にある。例えば，

(14) a. *ɢuŋɢaŋ=ʔad='uu* *ɬə=ɬɢaŋgulχa-gən.*
own.father=with=FOC 1SG.AG=work-PAST
'I worked with my dad.'

b. *q'inɢad sɢa-sgu='uu gaay=ɢa ɬə=ɬɢaŋgulχa-gən.*
spring CL-WHOLE=FOC that=at 1SG.AG=work-PAST
'I worked for all spring there.'

(14a) は「誰と働いたか」，(14b) は「どれくらいの期間働いたのか」という疑問文を受けての答えの文であり，前者では，その答え，すなわち新情報となる *ɢuŋɢaŋ=ʔad* 'with my dad'，後者では，同じく *q'inɢad sɢasgu* 'all spring' が焦点標識=*'uu* を伴って文頭に現われている。

(13) では，先行する文脈においても主語が1人称代名詞であったが，1人称代名詞のクリティック形が現われるのは，そのような場合に限られるわけではなく，先行する文において1人称代名詞（もしくは，1人称に言及する名詞句）が主語以外の文要素として現われる場合もある。例えば，次の例では，1人称代名詞のクリティック形が現われる (15[2]) 直前の文 (15[1]) において，1人称単数目的格代名詞 *dii* 'me' が目的語として現われている（先行する文脈の1人称代名詞に波線を付す）。

(15) [1] *huu ɢid=qawdi dii 'la kilst'i-gən.*
then a.while 1SG.OBJ 3 get.mad-PAST
'After a while, she got mad at me.'

とが圧倒的に多いといえる。

[15] 但し，主語と目的語の両方が名詞の場合には代名詞の場合と語順が違うので，また別の理由を考える必要がある。

[2] *huu* *'laa* *ɬə=ginχa-gən.*
then 3 1SG.AG=chase.away-PAST
'Then I chased her away.'

あるいは，次の例のように，先行する文において１人称に言及する名詞句*dii gudəŋaay* 'my heart' が現われる場合にも，後続の文の主語に１人称代名詞のクリティック形が現われる（この場合の１人称目的格代名詞*dii*は，譲渡不可能所有の所有者を表わす。上述参照）。

(16) [1] *dii* *gudəŋaay* *sgabjuu-ɢusdlə.*
1SG.OBJ heart mad-very
'I was really mad again.' (*lit.* 'My heart was crooked.')
[2] *gəm* *yaan* *'laa=gi* *ɬə=tləɢəd-ɢəŋ.*
NEG really 3=to 1SG.AG=help-NEG
'(So) I did not help them.'

更に，文脈から主語が明らかに特定できる場合は，主語が明示されないこともある。例えば，次の (17[1]) から (17[3]) は，独話の中に現われた一連の文であるが，(17[3]) においては，文脈から行為者が１人称であることが明白であるので，１人称代名詞が現われていないものと考えられる（１人称代名詞が現われるべき位置をØで示す）。

(17) [1] *ice cream* *'la* *tləɢuɬɢaay=dləw* *ɬə=qaaydxid+qaaydən.*
ice cream 3 make[NOM]=when 1SG.AG=flounce.off+leave[PAST]
'When they made ice cream, I went out.'
[2] *huu* *ɬə=qaa-ɢuŋ-gwaaŋ.*
then 1SG.AG=walk-around-about
'I walked around.'
[3] *qawdi='uu* *Ø* *sdiiɬ-tl'əχa.*
after.a.while=FOC (1SG.AG) return-arrive
'After a while I (=Ø) returned.'

この場合，１人称代名詞を明示するのであれば，使われるのはクリティック形の方である。

このように１人称代名詞のクリティック形が用いられ，更に，それが現われなくなるのは，その談話で語られる一連の出来事が１人称を中心に展開している場合である。すなわち，このような談話においては，１人称がその出来事の中心的な主体として話し手（＝１人称）の中に意識され，かつ，聞き手も同じように話し手を談話の中心として意識しているものとみられる。換言すれば，話し手と聞き手の意識の中において１人称の主体が活性化された（activated）状態にあり，文脈から十分それと推測できる場合と考えられる（「活性化activation」の概念については，Dryer 1996, Nikolaeva 2001とそこにあげられている参考文献を参照）。

こうしてみると，１人称代名詞の自立形が現われるのは，談話における主体が１人称以外に移り，それが再び１人称に戻ってきた時であると考えられる。つまり，話し手と聞き手の意識の中において，１人称以外の他の主体が活性化された中において，あえて主体が１人称にかわったことを示すために自立形が用いられると考えられる。例えば，

(18) *ʔwaa=ɢagən='uu ʔəsii='uu gina kiɬgula-s=ɢii*
because.of.that this=FOC INDF speak-NONPAST=into
ɬa ʔisda-gən.
1SG.AG put-PAST
'Because of that I put this (story) into the tape recorder (=a thing that talks).'

この文は，６分弱の談話の終わりがけ（およそ５分頃）に出てきたもので，それまでの文脈において主体として現われるのは専ら３人称のみであり，１人称は全く現われていない。すなわち，３人称を中心に展開していた談話の中で３人称が話し手と聞き手において活性化されている中で，その文脈から独立した１人称を導入するために１人称代名詞の自立形が用いられたと考えられる（勿論，この場合は，クリティック形を用いても文法的には適格な文と判断される）。

次の例も同様に，談話のその前において，自身がこれから語る話の内容の前置きが続いた後に発せられた文であるが，やはりそれまでの内容が３人称を中心に展開していたことから，新たに１人称の主体を導入するために自立形が現われていると考えられる。

(19) *gaay ɢidaay=ɢii* *ʔaa weyaad* *ɬa* *kiɬgulə-xidyaŋ.*
how.that.is=into now 1SG.AG tell-INCEP[PR]
'I am going to talk about that now.'

このように，１人称の主体を際立たせるためには，１人称代名詞の自立形が現われるのに加えて，更に，*='uu* (FOC), *=χan* (EMPH; 'even'), *=ʔəsəŋ* 'too' などの談話機能標識が１人称代名詞の自立形に付加されることがある。

３．２　複文における１人称代名詞の現われ

一方，複文における１人称代名詞の現われについてみてみると，主節・従属節を問わず，頻繁に現われるのは，やはりクリティック形である[16]。次にあげるのは，それぞれ主節の述語が１項動詞，２項動詞の場合に１人称代名詞のクリティック形が主節に現われている例である。

(20) 主節＝１項動詞 (*ʔaχada* 'sein')
dii=gi *tada* *tlaaʔaɬ* *ʔwaa=gi* *sdiŋ-gən=dləw*
1SG.OBJ=to year ten that=to two-PAST=when
ɢuŋɢaŋ=ʔad *ɬə=ʔaχada-ʔin.*
own.father=with 1SG.AG=seine-on.vehicle
'When I was twelve years old, I went seining with my father.'

(21) 主節＝２項動詞 (NP=*gi tləɢəd* 'help NP')
dii *gidɢa* *jaaɢa* *tl'ə=q'id-geey=dləw*
1SG.OBJ child wife 3INDF.PL=cut-NOM=when
'laa=gi *ɬə=tləɢəd-ʔin-ɢu-gən.*
3=to 1SG.AG=help-on.vehicle-PL-PAST
'When my son's wife had an operation, I went out to help them.'

(20) の従属節の主語は*tada* 'year' であるが，実際には１人称のことについて述べており（すなわち，直訳すれば「私に対して年が12である」），文脈における主体の一貫性が保たれていることから，後続の主節においても，１人称代名詞

[16] 以下にあげる複文の中には，等位関係を示す重文も含まれるが，ここでは，従属節標識（後置詞；例えば，*=dləw* 'when,' *=gyaan* 'when, and' *=qawdi* 'after a while' など）が付く節を一律に従属節と称する。

のクリティック形が現われていると考えられる。一方，(21) をみてみると，従属節の主語は3人称複数不定代名詞*tl'ə*であるのに対し，主節の主語は1人称であるというように，それぞれの節で異なる主語が現われているが，従属節に現われている3人称複数不定代名詞は，具体的な指示対象をもたず，その談話の中心となる主体を替えるものではないので，依然として1人称を中心とする談話であると考えられる。

上の例が示すように，1人称代名詞のクリティック形が主節に現われるのは，話し手と聞き手の間で1人称が主体として活性化されており，文脈的な一貫性が保たれている場合であると解釈できよう。

一方，1人称代名詞のクリティック形が従属節に現われる例は，次に示す (22) と (23) である。(22) では，主節の主語（＝3人称）と従属節の主語（＝1人称）が異なっているけれども，その前後の文脈から判断するに，基本的に1人称が談話の中心に位置付けられており，3人称代名詞が自立形で現われているのは，3人称代名詞が2項動詞の主語である場合には自立形が多く現われるという傾向によるものである（**4.1**参照)。

(22) 従属節＝1項動詞 (*qaayd* 'leave')
k'iwaay=ɢiisda *ɬə=qaayd-xidyaay=dləw*
the.door=out.of 1SG.AG=leave-INCEP[NOM]=when
dii=gi *'la* *kyaagəŋ-gən.*
1SG.OBJ=to 3 call-PAST
'When I was just about to leave from the door, she called me.'

また，次の例では，主節と従属節の主語が同じく1人称であり，いずれもクリティック形が現われている。

(23) 従属節＝2項動詞 (NP *xuda* 'bail out NP')
Ø=ɢiisda *ɢandlaay* *ɬə=xuda+heyluu-gən=gyaan*
(the.boat)=out.of the.water 1SG.AG=bail.out+disappear-PAST=when
ʔisəŋ *ɬə=tləw-qaa-gin.*
again 1SG.AG=by.boat-go-PAST
'When I bailed the water out of (the boat=Ø), I took off by boat again.'

一方，１人称代名詞の自立形が２項動詞を述語とする主節に現われる例は次の通りである。

(24) 主節＝２項動詞 (NP *gaad-ji-daal* 'drag NP (=octopus, shoes, etc.)')

huu *Bill* *ɬə=ɢəl-giŋ-s=gyaan*
then Bill 1SG.AG=on.back-CARRY-NONPAST=when
Tom=ʔəsəŋ *xyaay=gi* [...][17] *ʔwaa=gyaan*
Tom=too arm=to and
nawaay=ʔəsəŋ ***ɬa*** *ɢaad-ji-daal.*
the.octopus=too 1SG.AG by.pulling-CL-MOVE.HORIZONTALLY
'While carrying Bill on my back and Tom in my arm, I dragged the octopus.'

この文の従属節と主節の主語は，ともに１人称であり，しかも主体となるのは１人称であるゆえに，主節の主語を自立形で示す必要はないと考えられるが，おそらくこの１つの文に現われる参与者が１人称に加えて，*Bill, Tom, nawaay* 'the octopus' とあるので，あえて１人称が活性化されていないと話者が判断して１人称の自立形を用いたのであろう。

また，主節が１項動詞の場合に１人称の自立形が主語として現われている例として (25) をあげるが，これは，文脈を設定せずに，質問（翻訳）方式によって得たため，この１人称代名詞の自立形が談話機能上どのような働きを有するかは分からない。ただ，１人称の自立形がこのような環境にも現われ得ることはこの文から分かる。

(25) 主節＝１項動詞 (*xyaaɬ* 'dance')

daa *ʔis-tl'əχa-gaay=dləw* ***ɬaa*** *xyaaɬ-di-gən.*
2SG.AG be-arrive-NOM=when 1SG.AG dance-DUR-PAST
'I was dancing when you arrived.'

従属節に１人称代名詞の自立形が現われるのは極端に少なく，とりわけ１項動詞を述語とする従属節に自立形が現われる例は，テキストのデータからもま

[17] 言い誤りがあるために聞き取り不可能であるが，構造上，動詞が現われることが予想される。但し，その直後で文の切れ目があるとも解釈し得るので，この文は，ここにあげる例としては適当ではないのかもしれない。尚，英訳は文脈による。

た質問（翻訳）式によるデータからも得られていない。次にあげるのは，２項動詞を述語とする従属節に，１人称代名詞の自立形が現われている例である。

(26) 従属節＝２項動詞 (NP=*gii gud-ɬɢaɬ* 'think about NP')

ʔaa huyaad *'laa-ɢa=gii* ***ɬa*** *gud-ɬɢaɬ-s=gyaan='uu*

now 3-ATTR=into 1SG.AG by.thinking-ROOT-NONPAST=when=FOC

gəsiŋ='uu *Ø=ɢa* *'la* *tlaa-ɬɢaɬ-χaŋ.*

how=FOC (3)=in 3 by.hand-ROOT-maybe

'Now thinking about his (fish), I wonder how he did with it (fish=Ø).'

この文が発せられたのは，その前の文脈において，(人称代名詞で現われている)３人称を中心に話題が展開しており，１人称は，その文脈から独立している，つまり，活性化していなかったためにその自立形が現われたものと解釈される。

以上，１人称代名詞の自立形とクリティック形の現われについて述べてきたことをまとめると，クリティック形は，総じて，談話において主体となる１人称がその文脈からみて活性化されている時に現われ，逆に自立形は，活性化されていない時に現われるとみられる。言い換えれば，クリティック形は，談話が１人称を中心に展開され，その文脈が一貫している中で現われるのに対し，自立形は，その直前の文脈で言及されていないか，あるいは，主体として十分意識されていない中において新しく（あるいは再度）導入された場合に用いられると考えられる。文脈への依存度という点からみれば，クリティック形は，自立形に比べて依存度が高いといえよう。

４．３人称代名詞の自立形とクリティック形の現われ

前節では，活性化あるいは文脈への依存度という点から１人称代名詞の自立形とクリティック形の現われについて考察したが，本節では，３人称代名詞のそれらの使い分けについても同様に分析し得ることを示す。但し，３人称代名詞は，２項動詞とともに現われる場合，その主語だけでなく，目的語としても現われることがあるので，本節では，３人称代名詞が２項動詞の主語と目的語に現われる場合，１項動詞の主語に現われる場合を，１人称代名詞と同様，それぞれ単文（**４．１**）と複文（**４．２**）に分けて考察する。

4.1　単文における3人称代名詞の現われ

2項動詞を述語とする単文に3人称代名詞が主語 (A) として現われる場合，基本的に用いられるのは，自立形であり，その際の語順はOAVである。例えば，次にあげる (27a) は目的語が人称代名詞 *dii* 'me' の場合，(27b) は *ciina* 'fish' の場合，また，(27c) は目的語の標識に後置詞 *=ʔad* を伴う場合である。

(27) a. *dii　'la　stlə-sgiidən.*
me　3　by.finger-CONTACT[PAST]
'She poked me.'

b. *hawχan　ciina　'la　taa-di.*
still　fish　3　eat-DUR
'She was still eating fish.'

c. *dqanχan　ʔiid=ʔad　'la　gudaa-ɢu-gən.*
really　us=with　3　care.about-PL-PAST
'They really cared about us.'

2項動詞の主語として3人称代名詞の自立形が現われるのは，ほぼ統語的な条件によるものと考えられるが，クリティック形が全く現われないわけではない。次に示すのは，3人称代名詞のクリティック形が現われる例である。

(28) a. *Jane=han='uu　'lə=kiɢa-gən.*
Jane=QUOT=FOC　3=be.called-PAST
'She was called Jane.' (= 'Her name was Jane.')

b. *tl'ə=sɢaagaa=gi　'lə=ɬɢwaaga-gəŋ-ga.*
doctors=to　3=be.afraid-HABIT-NONPAST
'He is afraid of doctors.'

c. *gəm　Ø=ɢan　'lə=ʔunsid-ɢəŋ.*
NEG　(it)=for　3=know-NEG
'He did not know about it (=Ø).'

d. *gəm=ʔəsəŋ naagaay=ɢa qaaxul naay ʔis-is　'lə=gyaagiŋ-guda-ɢəŋ.*
NEG=too　the.house=in toilet　be-NONPAST 3=use-want-NEG
'He did not want to use the toilet in the house too.'

(28a) から (28c) の 2 項動詞は，目的語の標識（後置詞）を伴い（=*han* (28a), =*gi* (28b), =*ɢan* (28c)），意味面では，「呼ぶ」「恐れる」「知る」などその対象に変化をもたらすような動作を表わさない点で他動性が極めて低いという共通の特徴がある[18]。また，(28d) に現われる動詞*gyaagiŋ* 'use' は，それらの動詞に比べれば他動性が高いが，接尾辞-*guda* 'want to V' があるために動詞本来の表わす他動性よりも低くなっている[19]。このように 3 人称代名詞のクリティック形が 2 項動詞の主語に現われるのは，その動詞の表わす他動性が低いものに限られるといえよう。

続いて，3 人称代名詞が目的語 (O) として現われる場合をみてみると，より多く見られるのは，自立形の方であり，その場合の語順は，OAV である。例えば，

(29) a. *ʔawəŋ=dəŋʔad* *'la* *t'aləŋ* *qyaaŋɢa+ɢad.*
own.mother=with 3 1PL.AG see[outward]+run
'We ran to see him with my mother.'

b. *ʔisəŋ* *'laa* *ɬə=kil-q'əw-ʔu.*
again 3 1SG.AG=CAUSE-sit-SG
'I told him to sit down again.'

それに対して，3 人称代名詞のクリティック形が現われるのは，その節の 2 項動詞の主語 (A) が談話機能標識を伴って文頭に移動し，AOV の語順になる時である。例えば，

(30) a. *χuyaa='uu* *'lə=ʔisdaayaa-ʔaɬgiŋ-ga.*
raven=FOC 3=take.away[EVD]-guess-NONPAST
'It must have been a raven that took it away.'

b. *'lə=ʔawɢa='uu* *'lə=st'ida-gəŋ-gin.*
3=mother=FOC 3=discourage-HABIT-PAST
'It was his mother who used to stop him (from saying anything).'

---

[18] 尚，(28c) で目的語が現われていないにも拘わらず，クリティック形が用いられている理由については，2 節で述べた（特に (9a), (9b) を参照）。

[19] 実際，これらの文の主語を 1 人称単数代名詞にすると，現われるのは目的格の*dii*であり，動作者格の人称代名詞を主語に要求する典型的な 2 項動詞に比べれば他動性が低いことが分かる。

c. *gaŋaaχan='uu*　　*t'aləŋ=ʔəsəŋ*　　*'lə=suuda-gən.*
　so　　1PL.AG=too　　3=tell-PAST
　'So we told him too.'

(30a) と (30b) では，焦点標識=*'uu* が主語となる名詞句（(30a) の *χuyaa* 'raven', (30b) の *'lə=ʔawɢa* 'his mother'）に，また，(30c) では別の談話機能標識=*ʔəsəŋ* 'too' が付き，本来なら目的語の後にくるべきそれらの名詞句が前に移動されている。その結果，目的語となる3人称代名詞は，クリティック形で現われていると考えられる。このような統語的な環境（すなわち，AOVの語順）では，3人称代名詞の自立形が現われないという制約もあるが，これらの文が発せられたのは，いずれも目的語となる3人称を中心に展開しており，それら談話機能標識が付加された名詞句は，いずれもその談話に新たに導入されたものである（しかし，その後の文脈においてこれらの名詞句に話題の中心が移るわけではなく，依然としてその3人称を中心として談話が展開されている）。但し，Aとなる名詞句が前に移動する際に，談話機能標識を必ず伴うわけではない。例えば，

(31) [1] *'lə=sdiiɬ-tl'əχa-gaay=dləw*
　3=return-arrive-NOM=when
　k'yaaluu　*ʔawəŋ=gi*　*'la*　*k'usdlə-c'aa-s.*
　cormorant　own.mother=to　3　bring-in[EVD]-NONPAST
　'When he returned, he brought in a cormorant to his mother.'
[2] *'lə=ʔawɢa*　*'lə=taa-gaa-s.*
　his.mother　3=eat-EVD-NONPAST
　'His mother ate it.'　(Swanton 1905: 27)

(31[2]) の *'lə=ʔawɢa* 'his mother' は，その直前の文 (31[1]) の後置詞句 *ʔawəŋ=gi* 'to his own mother'（但し，再帰所有形で現われている）の中ですでに言及されており，新たに導入された名詞句ではない。一方，[2] の3人称代名詞 *'lə* は，[1] に現われた *k'yaaluu* 'cormorant' を指示しているが，この文脈の中では重要な役割を果たしていないためにクリティック形で示されていると考えられる。実際，この後に続く話の中で *k'yaaluu* 'cormorant' に言及されることがなく，それだけ低い情報しか担っていないと判断し得る。

以上みてきたように，2項動詞において3人称代名詞の自立形とクリティッ

ク形のいずれが現われるかは，主に統語的な要因から説明ができるが，1項動詞の主語に現われる3人称代名詞の場合は，統語的な要因というよりもやはり談話における働きによって自立形かクリティック形かが選ばれると考えられる。例えば，次の (32[1]) では3人称代名詞の自立形，(32[2]) ではそのクリティック形が主語として現われている。

(32) [1] *gəm 'la hiɬda-ɢaaŋaa-gən.*
NEG 3 move-NEG[EVD]-PAST
'He did not move.'
[2] *gaŋaaχan ʔisəŋ 'lə=sdiiɬ-ɢwaa-s=gyaan='uu 'lə=sɢayɬə.*
so again 3=return-out-NONPAST=when=FOC 3=cry
'So he went out again and cried.'

しかし，(32) に現われるこれらの3人称代名詞が指示する対象は同じではなく，[1] の自立形は「老人」，[2] のクリティック形は「アビ」をそれぞれ指している。これらの文が現われたのは，後者の「アビ」を中心として展開している部分であり，その「アビ」をクリティック形で示し，一方の「老人」が1項動詞の主語として現われる場合に自立形で示されるというように，ほぼ一貫して，自立形とクリティック形の違いによってそれらの指示する対象を区別しているようである（但し，2項動詞の場合は，文脈がないと，いずれを指示しているのか，判断できないこともある）。

次にあげる例でも，同じ文脈に現われる，指示対象の異なる3人称を自立形とクリティック形で指示し分けている。

(33) [1] *jiɢuyaay 'la qyah-q'ay-daal-di=qawdi han 'lə=suu-s.*
the.sun 3 by.looking-CL-MOVE-DUR=while thus 3=say-NONPAST
'After he had looked at the rising sun for a while, he said.'
（中略）
[2] *gyaan gaŋaaχan 'la suu-s-ii.*
and soon.after 3 say-NONPAST-INFO
'And he said.' (Swanton 1905: 29)

(33[1]) のクリティック形は，談話（神話）の中心となっている「息子」を指示しており，この「息子」がいわば活性化されている。(33) で「中略」とした部分は，その「息子」が「父親」に発するように促した発話が入っており，(33[2]) は，それを受けて「父親」が発したことを表わすものであるが，その主語は，自立形で示されている。つまり，この発話の中で活性化された「息子」と指示する対象を区別するために「父親」に対して自立形が用いられていると考えられる。

このように1項動詞における自立形とクリティック形の現われには，主に談話上の機能による違いが関与しているとみられるが，実際のテキストを見てみると，クリティック形の方が自立形よりも現われる率が高い[20]。次にあげる例は，*cinɢa* 'grandfather' について語っている談話の中の一部分を抜き出したものである。

(34) [1] *dii cinɢa=ʔəsəŋ naagaay=χaŋgu ɢudɬɢaɢaaŋʔu=gu q'əw-ʔu.*
my grandfather=too the.house=in.front.of chair=on sit-SG
'My grandfather was sitting on a chair in front of the house.'

[2] *yaan='uu 'lə=xud-sk'a-juu+ʔiwʔan-di.*
truly=FOC 3=INSTR-CL-ROOT+big-DUR
'He was whistling really loud.'

[3] *st'aaŋ=χan='uu yaan 'la q'ay-gudəŋ.*
own.feet=EMPH=FOC truly 3 CL-ROOT[ITER]
'He was stamping his feet.'

[4] *ʔaŋk'us 'iisda=χan 'lə=gəm-daga-sdlə.*
all.of.sudden=EMPH 3=CL-ROOT-completely
'All of sudden he made a loud noise.'

まず (34[1]) において初めて導入された *cinɢa* 'grandfather' が，続く (34[2]) において1項動詞 *xud-sk'a-juu* 'whistle' の行為者として現われ，3人称代名詞のクリティック形で示されている。(34[3]) の述語は，2項動詞 *q'ay-gudəŋ* 'stamp' であるために，その行為者となる 'grandfather' が今度は3人称代名詞の自立形で示されているが，(34[4]) はまた1項動詞 *gəmdaga* 'make a loud noise' の行為

[20] 概略的な数字であるが，単文におけるそれらの現われをみてみると，自立形が25%，クリティック形が75%である。

者として再びクリティック形で示されている。ここにあげたのは，談話のごく一部であるが，この場合，'grandfather' を中心として展開されている談話の中において，その一貫性を示すために，1項動詞の主語には3人称代名詞のクリティック形が用いられていると考えられる。

4.2 複文における3人称代名詞の現われ

3人称代名詞の自立形とクリティック形についてこれまでみてきたことは，複文においても当て嵌まるとみられる。まず，2項動詞の主語 (A) として現われる場合は，複文の主節・従属節を問わず，多く用いられるのは，自立形の方である。次にあげるのは，主節・従属節ともに述語が2項動詞（(35): *χasdlə* 'give,' *ʔisda* 'give,' (36): *tlənənəŋ* 'rub,' *dəŋdləst'a* 'take out'）で，その主語に3人称代名詞の自立形が現われている例である（それぞれ指示対象は同じである）。

(35) a. *musəmuus 'la daɢayaa-gən='uu tl'a=gi **'la** χa-sdlə-gən=gyaan*
cow 3 have[EVD]-PAST=FOC 3PL=PP 3 CL-ROOT-PAST=when
*ʔwaadχa naagaay=ʔəsəŋ tl'a=gi **'la** ʔisda-gən.*
the.store=too 3PL=PP 3 give-PAST
'He gave them the cow he owned and gave them the store too.'

b. *k'iijəŋ='uu **'la** tlənənəŋ-di=qawdi*
own.stomach=FOC 3 rub-DUR=while
*Ø=ɢiisda nəŋ ɢaχa **'la** dəŋ-dlə-st'aayaa-gən-ii.*
(stomach)=out.of INDF be.child 3 by.pulling-CL-TAKE.OUT[EVD]-PAST-INFO
'He rubbed his own stomach and then took a baby out of his stomach (=Ø).'

3人称代名詞のクリティック形が2項動詞の主語に現われるのは，単文の時と同様，他動性の低い動詞の場合にほぼ限られるとみられる。次にあげる (36a) はクリティック形が従属節に現われている場合，(36b) は主節に現われている場合を例示したものである。

(36) a. *ʔiid=gi **'lə**=ɬɢwaaχagilaay=dləw k'aadaay 'la qaa+k'at'a.*
1PL.OBJ=to 3=get.scared[NOM]=when the.deer 3 walk+drop
'It got scared of us, and it dropped the deer and walked away.'

b. *huu* Ø *dləɢudya-s=gu='uu*
then (3) lie.down-NONPAST=while=FOC
tləgu gina ɢid-s=ɢan='uu 'lə=ʔunsiida.
how INDF be-NONPAST=FOC 3=know[NONPAST]
'While lying, he knew how the thing was.'

これらの動詞(*ɬɢwaaχagiɬ* [> *ɬɢwaaχagil*] 'get scared', *ʔunsid* [> *ʔunsiida*] 'know')は，いずれも他動性が低く，その主語に3人称代名詞が現われる時に自立形よりもクリティック形が現われる傾向にあるのは，先にあげた単文の場合と同様である（(28) などを参照)[21]。

3人称代名詞の自立形が複文の従属節と主節の目的語として現われている例は次に示すとおりである。いずれも上に述べた単文と同様に，OAの語順でOの位置に3人称代名詞が現われている。

(37) a. ***'la*** *t'aləŋ tləχiigəŋ=qawdi nəŋ qaa-tl'əχa.*
3 1PL.AG ring=after.a.while INDF walk-arrive
'We rang it (= the bell), and after a while somebody came in.'
b. *t'aləŋ wasq'awsda-geey=dləw* ***'laa*** *t'aləŋ kil-ɬɢwaaχagil.*
1PL.AG scream-NOM=when 3 1PL.AG by.voice-get.scared
'When we screamed, we scared him.'

一方，クリティック形が目的語の位置に現われる例は，次にあげる通りである。

(38) a. *huu* Ø ***'lə****=qiŋ-gən=dləw* Ø*=ɢan 'la k'ah-ɢusdlə.*
then (3) 3=see-PAST=when (3)=for 3 laugh-very
'When he (=Ø) read it, he laughed at it (=Ø) so hard.'
b. *huu q'ada tləgaay=guud 'laana=gu 'la gaysdlə-ɢu-s=gyaan*
then Mainland=along village=on 3 stop-PL-NONPAST=when

[21] いずれも主語が1人称単数代名詞の時は，目的格*dii*が現われる。

gəm *nəŋ=tl'aa* *'lə=c'i-ɢu-ɢaaŋaa.*
NEG INDF=but 3=beat-PL-NEG[EVD]
'When they stopped at a village along Mainland, nobody beat them (in soccer).'

(38b) では，単文の場合と同様，Aとなる名詞句に談話機能標識（この例では，*=tl'aa* 'but'）が付いており，それによって，Aが前に移動し，Oが3人称代名詞のクリティック形で表わされている。(38a) は，Aとなる名詞句が従属節に現われていない点で (38b) や単文の場合と一致しないが，その主語が現われていないのは，主節の主語（*'la* 'he'）と同じであるからであろう。その際，従属節の動詞（*qiŋ* 'see'）が2項動詞であるため，3人称代名詞の自立形を用いると，主語として解釈されてしまうので，目的語であることを示すためにクリティック形が用いられたと考えられる。

複文において1項動詞の主語として現われる3人称代名詞をみてみると，クリティック形と自立形の使い分けは，単文と同様，主に談話機能上の違いを要因としてなされているとみられる。例えば，次の文では，従属節と主節のいずれにおいても，その1項動詞の主語としてクリティック形が現われている。

(39) *'lə=gyaaχa-gaay=gaŋaaχan* *yaan* *'lə=ɬɢu-ɢad.*
3=stand.up-NOM=as.soon.as truly 3=by.fear-run
'As soon as it (= the cow) stood up, it ran away with fear.'

この文は，'the cow' について述べている文脈において発せられたもので，その一貫性を示すためにクリティック形が用いられていると考えられる。この例の主節と従属節に現われるそれら2つの3人称代名詞の指示対象はいずれも同じ 'the cow' である。

一方，主節と従属節の両方において，3人称代名詞の自立形が主語として現われることもある。例えば，

(40) *gaŋaaχan='uu* *ʔisəŋ* *'la* *sdiiɬ-ɢwaa-s=gyaan='uu*
so=FOC again 3 return-outward-NONPAST=when=FOC

gyaa=ɢa q'əw-ʔw-əs=gu 'la sɢayɬə-gən.
where=in sit-SG-NONPAST=at 3 cry-PAST
'When he returned outside again, he cried at the place where he was.'

(40) は，3人称で表わされる登場人物が二人いる談話の中の一つの文で，その文脈においては，その登場人物の一方を自立形，他方をクリティック形で表わすことによって，それら異なる指示対象の区別がなされている。従って，(40) では，それらの登場人物の一方を表わすために3人称代名詞の自立形が用いられていると考えられる。

主節と従属節の述語のいずれもが1項動詞で，従属節に3人称代名詞の自立形，主節にクリティック形が現われる場合の適例は得られていない。

一方，従属節にクリティック形が現われ，主節に自立形が現われる例には次のような文がある。

(41) *'lə=sɢayɬə=qawdi='uu 'laa=dəŋʔad 'la qaa-xul-s.*
3=cry=after.awhile=FOC 3=with 3 go-outward-NONPAST
'After he had cried for a while, he went out with it.' (Swanton 1905: 7)

この例における2つの3人称代名詞はいずれも同じ対象を指示しているので，主節の主語にもクリティック形が現われることが予想されるが，自立形が現われているのは，その前に後置詞句 *'laa=dəŋʔad* 'with it' があるゆえと考えられる。この後置詞句は，動詞 *qaa* 'go' の項ではないが，1項動詞でも前に後置詞句がある環境では，3人称代名詞の自立形が主語に現われることが多い。逆に，副詞が現われる場合には，3人称代名詞のクリティック形が主語として用いられるようである。次の例のように，副詞句 *ʔisəŋ=ʔəsəŋ* 'again and again' がある場合には，3人称代名詞のクリティック形が主語として現われる[22]。

(42) *huu 'lə=sdiiɬ-ɢwaa-s=gyaan ɢaal sɢasgu ʔisəŋ=ʔəsəŋ 'lə=sɢayɬə.*
then 3=return-out-NONPAST=and night all again=too 3=cry
'Then he went out again and cried all night again.'

[22] 但し，この例は，3人称代名詞で表わされる指示対象が二人いるために，それらを区別するために，一方をクリティック形で示したという可能性も考えられる（上掲の (40) と比較されたい）。

但し，ここに述べたような自立形とクリティック形の現われは，あくまでも一定の傾向であり，(42) のような環境において自立形が現われることを制約するものでもなく，他方，(41) のような環境でもクリティック形が現われることがある。また，同じ傾向は従属節においてもみられる。

以上，３人称代名詞の自立形とクリティック形の違いについて述べてきたことをまとめると，２項動詞を述語とする節においては，A（主語）には自立形が現われることが多く，クリティック形が現われるのは，他動性が低い動詞の場合に多い。また，O（目的語）に自立形かクリティック形のいずれが用いられるかは，語順によって決まると考えられ，すなわち，OAの順であれば自立形，AOの順であればクリティック形が用いられる（後者の場合，Aには談話機能標識が付くことが多い）。このように３人称代名詞が２項動詞を述語とする節に主語として現われる場合は，主に統語的な環境によって自立形かクリティック形かが決まるといえる。

一方，１項動詞を述語とする節においては，主語となる３人称代名詞は，自立形，クリティック形の両方が可能であるが，いずれが用いられるかは，主に談話上の働き，すなわち文脈に依存している場合にはクリティック形，文脈から独立したような場合には自立形が現われる傾向にあると考えられる。

5．結言

１人称代名詞と３人称代名詞の自立形とクリティック形の現われは，おおよそ統語的な要因と談話的な要因の二つが関与しているといえるが，その関わり方は，１人称代名詞と３人称代名詞では異なっている。まず１人称代名詞におけるそれらの形式の現われをまとめれば，次の表のようになろう。

(43)　１人称代名詞のクリティック形と自立形の現われ

	目的語		目的語
A	あり		なし
	ʧɔ	*ʧaa*	*ʧaa*
S	*ʧɔ*	*ʧaa*	
	＋ ～ －		
	活性化activation		

上の表において太線で囲ったのは2項動詞のみに当て嵌まる要因であり（(1) を参照），一方，網掛けは，「活性化」の要因が及ぶ範囲を示す。ここにおける「活性化」は，3節で述べたように，主体となる1人称が話し手の意識の中で中心的な参与者として捉えられ，それを中心に話題が展開されているかどうかであり，そのような場合にはクリティック形が用いられ，一方，その文脈からいわば独立して現われるような場合には自立形が用いられると解釈する。但し，活性化はそもそも連続的であり，その違いが劃然としているわけではないので，表の中では「～」で示している。

3人称代名詞のクリティック形と自立形の現われは，次の表のようにまとめられる。

(44) 3人称代名詞のクリティック形と自立形の現われ

		'lə		*'laa*
A	他動性	低	～	高
O	語順	AO		OA
S	活性化	+	～	−

3人称代名詞は，2項動詞（表の太線より上）では，A（主語）とO（目的語）の両方に現われることがあり，Aの場合は，その動詞の他動性の高低によってクリティック形か自立形かのいずれかが現われる。ただ，他動性は連続的であるので，表の中では「～」で示してある。また，3人称代名詞が2項動詞のOとして現われる場合は，それら二つの形式の現われは，語順によって決まるが，その語順の決定には，Aとなる名詞句に談話機能標識が付くかどうか（あるいは，付加されなくてもAが前置される）という談話的な要因も関与しているとみられる。一方，1項動詞のS（主語）として現われる場合は，活性化の要因がそれらの形式の選択に関与していると考えられる。但し，3人称代名詞に関わる活性化は，1人称の場合のそれと同じである一方，同じ文脈において3人称代名詞で指示される対象が複数ある場合に，それらを区別するために，自立形とクリティック形が使い分けられることもある。

これらの要因のうち，最も優先されるのは，統語的要因であることはいうまでもない。一方の談話的要因は，あくまでも話者自身のその時々の視点によるものなので，一貫性を欠くことがある。特に3人称代名詞の場合は，その指示

対象が何なのかを定めがたいことがあるなど，時として曖昧性を生みだすこともある。それは，「活性化」というのが専ら話者の視点によるからであり，それが連続体をなす以上，そのような曖昧性が生じるのは当然の帰結であろう。

本稿では，単文と複文のそれぞれに分けて，１人称と３人称の代名詞のクリティック形と自立形の現われの考察を試みたが，他にも，従属節のタイプによる違い，関係節や補文構造における現われ，更に，焦点標識=*'uu* などの談話機能標識との関係も含めて再度分析する必要がある。

参考文献

Dryer, Matthew S. 1996. Focus, pragmatic presupposition, and activated propositions. *Journal of Pragmatics* 26: 475–523.

Enrico John. 2003 *Haida syntax.* Lincoln: The University of Nebraska Press.

——. 2005. *Haida dictionary: Skidegate, Masset, and Alaskan dialects.* Fairbanks/Juneau: Alaska Native Language Center and Sealaska Heritage Institute.

Hori, Hirofumi. 2008. Semantic motivations for split intransitivity in Haida. 『言語研究』134号：23–55.（日本言語学会）

Nikolaeva, Irina. 2001. Secondary topic as a relation in information structure. *Linguistics* 39 (1): 1–49.

Swanton, John R. 1905. *Haida texts and myths: Skidegate dialect.* Bureau of American Ethnology, Bulletin 29. Washington, D. C.: Government Printing Office.

＊ハイダ語のデータを提供してくださった話者は次の方々である（イニシャルと生（没）年，男女［m/f］の別のみ記す）。JC (1924, f), RJ (1924, m), DM (1929, f), NP (1926–2012, m), ER (1921–2010, f), EW (1913–2009, m), JW (1921–2008, m), JY (1923–2008, m)。Dii gi tllg̱iidan sg̱awdagi dallng g̱a hll kil'laaga. Haw'a!

＊本稿は，科学研究費（基盤研究 (C)）「カナダ北西海岸地域諸言語の形態統語法に関する記述的研究」（研究代表者：堀　博文，課題番号：25379470）による研究成果の一部である。